

宮内踊りの存続、発展のため

宮内踊り保存会

■ 宮内踊りとは？

宮内踊りは、江戸時代後期の宝暦年間(1750年代)吉備津神社の門前町、宮内に芝居興行に訪れた、花形歌舞伎役者「三柵(みます)大五郎」が振り付けて、この地の芸者衆に踊らせたのがはじまりとされています。踊りの特徴は、歌舞伎の“六法”をくずして構成されたものといわれ、単純な動作をゆるやかな速度で踊る点にあります。優雅な動きの中に、男性的な美しさを感じさせます。

吉備津神社夏祭り(例年7月31日)で地域住民と共に踊りを奉納しています。地域住民を中心に約200名が参加します。➡

1935年ごろに宮内踊りを盛んにするために「宮内踊り保存会」ができました。戦中戦後には衰退した時期もありましたが、復活しなければという機運が高まり、活発に活動するようになりました。昭和34(1959)年、岡山県指定重要無形民俗文化財に指定された、歴史ある踊りです。



■ 活動の様子

保存会のメンバーは毎月1回、鯉山小学校体育館で練習をしています。7月には吉備津神社夏祭りの奉納踊りに向けて、小学生を中心に公会堂やコミュニティハウスで踊りの指導をします。地域の文化を伝承し後継者の育成を図ると共に、地域活性化に寄与しています。



■ 存続・発展のために

保存会は地域行事や市内外のさまざまなイベントに参加し、宮内踊りの存続・発展に力を入れています。吉備津には「栄西禅師」の生誕地があり、その縁で栄西が開山した建仁寺(京都)で踊りの奉納を行いました。コロナ禍で中止していましたが、再開していきたいです。

